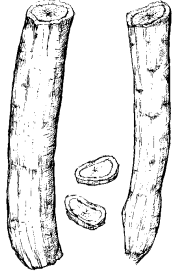


音順	生薬名	中医の性味・帰経	中医の用量
せー11	せきしゃく 赤芍	苦・微寒 肝	6～15g、煎服。
中医生薬解説			
 <p>シャクヤクのコルク皮を含む根（赤芍）</p>		<p>清熱涼血 熱入営血の夜間の発熱、皮下出血、吐血、鼻出血、舌質が絳などの症候に、犀角・生地黄・牡丹皮・玄参などを用いる「犀角地黄湯」。</p> <p>血熱妄行による出血に、生地黄・牡丹皮などを用いる「涼血地黄湯」。</p> <p>祛瘀止痛 血瘀による腹腔内周腫瘍や産後の瘀滞腹痛に、当帰・川芎・桃仁・紅花などを用いる「桂枝茯苓丸」「血府逐瘀丸」「桃紅四物湯」。</p> <p>血熱による瘀滞で無月経、月経痛などを呈するときには、丹参・桃仁・沢蘭・益母草などを用いる。</p> <p>打撲損傷による腫痛、疼痛に、乳香・没薬・当帰・桃仁などを用いる「折衝飲」。</p> <p>瘡癰腫毒（皮膚化膿症）の腫脹、疼痛にも、金銀花・連翹・山梔子などを用いる「仙方活命飲」。</p> <p>清肝泄火 肝火による目の充血、腫脹、疼痛に、菊花・夏枯草・決明子・薄荷などを用いる「石決明散」。</p> <p>肝鬱化火の脇痛には、柴胡・香附子・青皮・鬱金などを用いる。</p>	
		<p>参考 芍薬は『神農本草経』では、赤・白の区別がなされておらず、宋の「図経本草」で初めて白芍と赤芍が分けられた。</p> <p>白芍はシャクヤクのコルク皮を除去した根で、補益に働き、赤芍はシャクヤクのコルク皮を含む根で、通瀉に働く。</p> <p>白芍は補血・止血の効があるとされ、赤芍には清熱涼血・活血の効能がある。温熱病、無月経、腹部腫瘍、腹痛、出血、腫れ物などに用いる。赤芍は白芍と牡丹皮の中間的な作用があるといわれる。このため「瘀血」による疼痛や内出血には白芍よりも赤芍を用いたほうが効果的である。</p> <p>牡丹皮・赤芍は清熱涼血、活血散瘀の効能を持ち併用されることが多い。</p> <p>牡丹皮は涼血除蒸にすぐれ、血分実熱だけでなく、陰虚発熱、虚熱骨蒸にも適するのに対し、赤芍は血分実熱だけに用いるほか、活血止痛、清肝火にすぐれているので、肝熱目赤、肝鬱脇痛に用いる。</p>	
		<p>使用上の注意 使用上の注意 血虚で瘀滞を伴わないものや、瘡癰腫毒が自潰した後は用いてはならない。藜蘆に反する。</p>	
中医以外の生薬解説			
神農本草経		味苦平、邪氣腹痛を主どり血痺を除き堅積を破り寒熱疝瘕を主どり痛を止め小便を利し氣を益す。	
薬 徴		結實して拘攣するを主治し、旁ら腹痛、頭痛、身體不二、疼痛、腹滿、咳逆、下痢、腫膿を治す。	
新古方薬囊		結實とは凝りの事なり、拘攣とは引かれ、引きつらるるを謂ふなり、 芍薬 はよくたるみを引きしめ、痛みを除くの効あり、結實も拘攣も弛みより來るものと見るべし。	